時代小説自選集 第二巻

赤穂浪士 上

大佛次郎

読売新聞社

大佛次郎時代小説自選集　第二巻
赤穂浪士　上

昭和四十五年二月十日　第一刷
定価　八〇〇円
著者　大佛次郎
発行者　二宮信親
発行所　読売新聞社
郵便番号一〇四　東京都中央区銀座三の二の一
五三〇　大阪市北区野崎町七七
八〇二　北九州市小倉区明和町一の二
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　協和製本株式会社

©, Jirô Osaragi, 1970

赤穂浪士（上）

装丁・題簽　中村岳陵
見返し絵　佐多芳郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

蔭を歩く男

将軍が退出になったのは暮六つ近い時刻である。警衛がとかれると同時に、待ちかまえていたように外の群衆が雪崩入って境内の松の間に、ほこりが煙のようにもうもうと起こった。その上から、傾いた陽が斜にさして、濃淡の分れた光の柳条を一面に降らせていた。関東新義真言の大本山、護持院の七堂伽藍は、この夕陽の中に松と桜とをめぐらせて燦爛とつらなっている。

空は広々として絹をひろげたように明るい。「鐘一つ売れぬ日はなし」という江戸の春である。人々は青い松の間を行く荘厳な鹵簿の、槍、挾箱、打物、柄傘などが日にきらめくのを遠くから見ていた。

公方様のお日和じゃ。と誰かいっていたが、聞いただけの者は晴れ晴れと微笑してこの泰平な時世に生まれたことをこの上ない幸福のように考えずにはいられなかった。境内には、護摩のにおいが放縦に思われるまでに漂っている。千手堂、聖天堂、大師堂、常行堂と人波の動くところに、燭火は輝いて、真言神秘をつつむ厳そかな堂内の幽暗に、金色の扉帳をひらいた仏龕を浮き上らせている。朗々たる読経の声は、香煙とともに堂に溢れて、夕陽の空にのぼる。その調和ある音声の高低にあわせて、厳そかな豪奢と華やかな敬虔の気が人々の頭上に花紋を描きながら、ゆるく鷹揚な波動を江戸一円の空に送っているように思われた。大門をくぐって入り堂と堂とをつないで動いている群衆も花を水に浮かせて見るように、色さまざまにたとえようもなくはなやかだった。度々の華奢の禁令も、熟れきった時代の空気の醗酵を止めることは出来なかったと見える。程よい日光と湿気とを得て花は咲くよりほかになかったのであろう。紫、浅黄、紅打などの染綿の帽子、袖口に針金を入れ綿を厚く入れてふくらみをとる工夫までして美しく丸くきった袖も軽々と、吉弥結びに帯を結んだ女達、流行の小太夫鹿子、千弥染は、そこにも、ここにも見受けられる。男も、紅鳶、縹、茶、空色などの羽織、下着の緋無垢、着物の裏にも燃えるばかりの紅絹をつけたのが多く、熊谷笠のお武家の後には鎌ひげつけ毛脛を出した奴がお供、さては黒縮緬のひとえ羽織を着たお医者など、師宣の絵から脱け出して来たといえば一番わかりの早い、華奢をつくし優婉の限りの姿をした男や女達が、いきいきとして話したりほほ笑んだりして間断なくざわざわという足音をきかせながら、この色の波を動かして行くのである。

その若い浪人者は、大門の脇に立ってこの雑沓を眺めていた。

他にも道の脇へ出て通る人間を見ているものは男女ともに多い。が、この若者の切長の目にはどこか人と違うものがあった。齢は二十を出たくらいであろう。鼻筋がとおって彫の深いはっきりとした顔立をしている。服装を当今風にさせたならば、あるいは人目をひくだけの美貌ではなかろうかと思われる。が、顔全体

の表情が、齢に似ずおっとりしたところがなくて、けわしいといいたい位つめたく冴えて見えた。目付がそれを代表している。切長の、はっきりした美い形をしていながら、この華やかな雑沓を眺めても他の者のように浮いた色を見せることもなく、終始、水のようにひややかな一色に止まっている。いや、時にその冷たい色が凝と重なり合って来て、冬の水の底にきらりとする魚のうろこのように色なく閃く時がある。その刹那に、肉の薄い形のいい唇が、隅のところで心持反って、さげすむような微笑を含むのである。

「あ、あすこへ来た男を知っているか？」

傍で、それまでも何か話していた商人風の二人連れの一人が急にこういったので、若者は聴耳を立てた。

「ど、どれ？」

「それ、そこへ……奴を連れて、いやに威張って来る男さ」

男があごでさす方角を、若者ものび上るようにしてのぞいて見た。

「ふうむ、存じませぬな……どこかの御典医ですか？」

と連れは怪訝らしかった。

話題にのぼっていた男は、実際、御典医らしい風采で、その豪奢で寛濶な姿には人目をひくものがあった。供には、奴のほか、弟子らしい男がこれもお古を頂戴に及んだらしい黒縮緬の紋付をぞろりと着て、うやうやしく跟いている。

「あれが箸屋の伝助という男さ」

「箸屋の？」

「野暮な声をしなさんな。きこえたら、ただではすみますまい。もとは箸削りでも、今はれっきとしたお犬医者、滅多なことをいうて見なさい。遠島ですめばよいが、二つとない笠の台が飛ぶかも知れぬ」

と、ひそひそという。

若者は、無論きこえない振りをしていたが、「ははあ」と思ったらしく、ちょうど前を通り抜けて大門をくぐって行く医者の後姿をずっと見送った。例のつめたいあざけりを含んだ微笑が、静かに唇に匂っていたのである。

箸屋の伝助という男の突飛な出世振りは、ひと頃二人以上人間の集まるところではどこでも噂の種にされたものだ。誰も、口ではさげすんだようにいいながら、内心は伝助の幸運をうらやんでいたのに違いない。伝助のように短日月の間に目も鮮かな出世を見せた者は何時の時代にもそう滅多にあろうとは思われなかった。それというのもずっと以前からの生類憐愍の御布令からだった。これもこの護持院の大僧正隆光が信心の念篤い将軍家にお勧めしたからだという。生類の中でも、犬が、将軍綱吉が戌の年だからというので、特別のまるで気違いじみた保護を受けることに成った。野良犬を殺したからといって死罪になった者は珍しくない。飼犬が子供を生めば強制的に一々毛色まで書いて届けさせる。役所には市中の犬の戸籍がちゃんと出来ているし、野良犬を収容するために中野に周囲百町もある囲い地を作り犬小屋を建て

た。小屋は柿葺の屋根で天井にも床にも板を敷いた立派なものである。炊出し所がある。役人番人の小屋がある。日々役人付添いの上でかなりの人数が節のない檜で作った箱に綿の厚い蒲団を入れたものを担って市中を歩き、野良犬がいれば丁寧に収めて中野まで荷なって帰るのである。小屋へ行けば毎日炊出しをして不足なく食事をさせる。犬一匹一日に白米三合、十匹について一日味噌五百目、乾鰯一升ずつときめてあった。勿論病気になれば小屋に医者が二人いて直ぐと手当てをしてくれるのである。

この箸屋伝助というのは、麹町三丁目で箸削りを生業として、しがない暮しをしていた男だったが、近所の犬で病気になったものに薬をこしらえてやったところが、それがよく利いたという評判がお上にきこえてから数年前犬医者に取り立てられて地所の付いた屋敷まで拝領することに成った。患者があって迎いがあれば、ものものしく駕籠に乗って診察に行くのである。

箸屋伝助改め丸岡朴庵の後姿は、やがて大門の内に消えた。若者の唇からも、例のなぞのような微笑が消えている。寺ではちょうど暮六つの鐘をつきはじめている。

若者は黙々として雑沓の中を歩き出した。

将軍の幾度目かのお成を仰いで光栄に輝いたこの護持院が、その夜危うく猛火になめられようとした。最初火を見つけたのは、その頃鎌倉河岸の脇に住んでいた仙吉といって相当名のきこえた御用聞きだった。

仙吉は、麹町に用があって、更けてから寂しい濠端を一人で帰って来たものだったが、護持院の土塀に沿って、一層暗い道を歩いていると、行手の土塀の内側がぱっと明るくなって、その一角の木立の青い色と堂の丹塗の色を闇に浮かせながら、火の粉があがって、ぱちぱちと物の燃える音がきこえた。

まさか放火とは気がつかず、焚火だとばかり思っていたのだが、その途端に土塀の上に黒い人影が現われてひらりと外へ飛び降りたのを見ると、ぎょっとして身体をかたくしながら、流石に稼業で、急に地にうずくまって様子をうかがった。幸いと、その人間はこちらへ歩いて来る。二本差している……と見るか見ないかのうちに、

「火事だ！」

という声が土塀の内で聞こえた。

はっとした時、向うは、すたすたと急ぎ足で通り過ぎようとするのだ。

仙吉が、地を蹴って立つ。と同時に、武士の方でも急に人の気配を知って振り返る。

と見て、

「もし！」

と軽く何でもないような調子で声をかけたのは、流石に呼吸を心得たもので、相手の出端を巧みにはずした。

「鷹匠町へまいるには……どうまいったら宜しゅうございましょう……」

相手は確かにまごついて、咄嗟の措置を取り損じたのだが、
「鷹匠町か？」
と聞き返しながら、これも曲者、仙吉に右へ廻る気配を感じると、つと体をひらきざま抜き討とうとしたが、それを感付かぬ仙吉でなく、急に飛びすさって、
「危ねえ！」
と叫ぶと一緒に、繭から出た糸のように仙吉の手から走り出た縄が、武士の頭上にきりりと舞って、腕にからんでいた。
「むむ」
夜目に白く颯と刀身が流れた。よろめいて仆れるばかりのところで仙吉は踏み止まった。
その間にばたばたと相手は駈け出していたのだ。
「畜生！」
と唸る。
手首にからむ斬られた縄の端をかなぐり棄てて、自分も後から駈け出していた。
護持院では今、頻りと火に水を掛けているらしい。わいわい騒ぐ声の間にざぶんざぶんと水の音や、何かでたたいている音がきこえている。幸いと見付け方が早かったのと、何しろ護摩堂に綱吉自筆の『護持院』の額があって、その非常の場合の立退きの用意として役夫料三百人扶持を受けていたことなので、手も揃っていたと見える。火は縁の下をこがしたぐらいで大事にならず消し止めることが出来た。
過失ではない。あきらかに放火である。将軍家の帰依浅からぬ護持院を焼こうとしたとは、容易ならぬ事件だった。
間もなく知らせによって寺社奉行が馬を走らせて来て、暗い木立の間を提灯の灯がいくつも飛んで来ていた。
俎橋へ出るまでに、武士は、駈けながら刀を鞘におさめていた。
ちょっと立ち止まって、振り返って、闇の中に近寄って来る足音を聞くと「うるさいな」というように舌打ちしたが、また走って、角を曲るとかたわらの路地の木戸を押した。
木戸はゆれながら開いた。
直ぐと内へ入ると、今度は、もとどおり内側から木戸をしめた。
間もなく、仙吉が息せき切って駈けて来たが、この町角まで来て、はたと途方に暮れたように立ち止まった。
道は三本に別れている。
地面に匍うようにして、蹋んで、闇を透かして見たが、目あての人影は見えなかった。
すこし先に、自身番小屋があって、闇の中にぽーッと黄ばんで、あかりが映った障子が見えた。
仙吉は急に思い立ったように、そちらへ駈けて行った。
「爺つぁん、爺つぁん……」
と寝込んでいる番太を起こしているらしい。
その間に、こちらで木戸が音もなくあいて、先刻の武士の姿を

吐き出した。
武士は足音を忍ばせて橋を渡った。それから、また急ぎ足になって間もなく九段坂を登ると、馬場を右手に三番町通りを歩いて御厩谷へ降りて行った。
黒板塀が陰気につづく、屋敷町の深夜はひっそりとして夜気が時々立木のこずえを動かすだけである。武士は黙々として歩いて行って、とある屋敷の前に立ち止まると、くぐり戸を押して見た。
あかないのを見て、
「佐助！　佐助！」
と近所を憚るような低い声で呼ぶ。
門番小屋の窓を灯影が明るくした。間もなく、がたぴしと戸の開く音がする。
「どなた様で」
「私じゃ」
ぎーッと、重い音をたてて潜戸があいた。
「気の毒したな」
武士は、こういって、内へ入った。
直ぐと正面に玄関がある。しかし、武士はその右手にある木戸をおして、暗い庭に入った。かなり広い、木立の深い庭である。
雨戸を閉じてしんとしている母屋について廻ると、繁みの奥に小さい離屋がある。
武士はそばまで来てからまた低い声で呼んだ。
「母上……母上……」
直ぐと、雨戸の内側に人の気配がして、雨戸があく。
「隼人か？」
「左様にござりまする」
「今、燈火をつけます」
いそいそとうれしそうな顔が暗い中でも想像出来るような声音であった。
「いえ、……御寝みになっておいでたので御座りましょう。こんなに遅く申し訳御座りませぬ」
こういいながら、武士は頭巾をぬいで、衣服の裾のほこりを払った。間もなく雨戸のすきからもれて来たやわらかい灯影は武士の横顔を明るくした。これは今日の夕方護持院の雑沓の中に立っていた若い浪人者である。
「ほんに、三日も四日もたよりがないのでどうおしかと思うていた」
母は、ぼんぼりを差し向けながら、こういった。
「お腹は空いていないのかえ」
母は、久し振りで来た息子に、三日分も四日分もたまっていた慈愛を一度に振り撒こうとして心をくだいている模様だった。
「もう、火も消えかけている。お湯もさめている……」
「いえ、何も欲しくはありませぬ。早く寝みたいと思います」
と答えてまた急に、
「叔父上は、また御立腹で御座りましょうな」
「いえ……」

と当惑顔で、
「お前が来たら何か話があるとはおっしゃっていられた。家を出たきりにして無沙汰にしておいでなのをよくは思っていらっしゃらぬようだ」
「でも、家にいても仕方ありませぬ。叱言をいわれる叔父上が御無理じゃ。今の世の中は働きたいにも遊んでいなければならぬように出来ている」
隼人は、寂しく微笑しながら、
「知恵があっても、腕があってもじゃ。……いっそ犬医者になって犬の脈でもとりましょうか？」
「馬鹿をおいいでない」
母は、息子の冗談とも真面目ともつかぬ語調に驚いたらしく、こういってから重苦しくだまり込んで火鉢の灰に眸を落とした。
「馬鹿になりませぬなあ。今日も護持院で一人見ましたが、いや、なかなかの勢いで御座ります。今の世の中で暮しいいのは商人と犬とで御座りましょう。武士ならば家柄と身分とが入用で御座います。それでさえも商人の金の力に頭を抑えられます。両刀たばさんでおめおめと野良犬の番人をしている者も御座ります」
「それでも、何時の世になろうとも武士ばかりがまことの人じゃ。商人づれが如何に成り上ろうと比較にならぬ。商人は石川六兵衛ほどの金持でも、贅沢が分に超えたというので欠所になったではないか。上に武士あっての民百姓じゃ」
「さて、いつまで、このままでおりましょう。世の中は人も知らぬ間に変わりまする」
これはむしろ、その変化を望んでいるような口吻に聞こえたので、母は再び驚きの目をみはって、無言で隼人の顔を見詰めた。
隼人は冷やかな微笑に唇をそらせていた。
「ほんに、お父様が昔のとおりでいて下すったなら……」
と思わず女らしい愚痴が出る。
「いや、おっしゃいますな。私は、父上がおなくなりに成ったのは父上のお倖せだと思うております」
「何といやる？」
「御立腹なさりますな。これは、まことのことで御座りまする。父上のように一徹な武士気質の方が如何して今の時世に向きましょう。父上に犬の番が出来ましょうや、また今の世間では極く当然のこととされている賄賂を、何で、あの清いお心持に我慢なされましょうや。三河武士は名のみ、形のみ。まことの武士がだんだんと住みにくくなる御時世じゃ。これを世間が悪くなった故とは思いませぬ。こうなるのが自然の勢いなので御座りましょう。真の武士は世の中に無用のもの。さればこそ、あたら父上ほどの武士が、たかが材木三、四本のために……」
「隼人、またそれを……」
母は、きっとして烈しくいいながら、その目は知らず知らず涙ぐんで来ていた。隼人も、悲痛を押さえて黙然とうつ向く。母のためには亡き夫、隼人には亡き父堀田芸右衛門の最期のことが、二人の胸を一杯にしたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

甚右衛門は、そもそもの初め護持院建立の時に普請奉行を勤めた人だったが、知足院本坊の普請に用いた木が他の諸堂に比べて、用材がやや粗末だったのを、御奉行向念入れざる仕方不埒というので、甚右衛門は三宅島へ遠島になり、配所に病死したのである。隼人のいったとおり、まことにたかが材木三、四本のことであった。それから母子の者はこの叔父のかかり人となっているのだった。

二人とも床へ入ってから、隼人は枕もとの行燈を吹き消した。春の夜の、厚ぼったいやみが、隼人の顔の上にある。何となく息苦しい気持である。そばでは、母が、あたりが暗くなってからはじめて心の用心の鍵がはずれたように、急にいつもより愚痴っぽくなって、いろいろの不平をのべはじめていた。

「いつまでも、この家の厄介になっているわけにも行かないのだから……いっそどこか田舎へ引っ込んでしまった方がいいように思うこともあるよ。けれど、お母さんはそれでいいとしても、お前はまだ若いし……兎に角これからなのだから……ほんとうに何といっても江戸だからね。子供の内から何をやっても他人様に負けたことがなく、よく出来たお前だもの、自棄を起こさないで辛抱強くしていたら、きっといいことがあると思っていますよ。ほんとうに、お母さんには、お前だけなんだから……」

「わかっています」

いらいらした声が答える。闇の中で寝返りをうつ気配がした。

母はさびしく無言になったが、

「草臥れているところを悪かったね。眠かったろう……つい愚痴が出てしまって」

隼人は決して眠くはなかった。頭の芯に熱を持って目は冴えていた。

母が可哀相だとは思う。しかし自分の方が余計可哀相な気がした。母はまだわが子の出世に期待を持っているが、自分にはそんな希望は皆目感じられない。ただ、灰色の厚い壁が目の前に立ちふさがっているのが感じられる。たたこうが、押そうが、びくともしない岩畳な壁である。毀したい。何もかもたたき潰すよりほかにこの息苦しい気持から逃れる法はないような気がする。ちょうど着物の裾に火がついたようにじっとしていられないように思う。

隼人は、熱した額を急に掻巻の襟に埋めた。何か知らず夜具を蹴飛ばして起き上りたい気持を押し殺すために息をつめたのだった。

闇の中に、先刻の不浄役人の烈しい顔付がちらちら浮かんで来た。

とうとう来るところへ来てしまったというような気がしている。

頭巾に貌をつつんでいても、先方では職掌柄たしかにこっちの顔を見てしまったらしい。道をきく振りをしてそばへ寄って来たのだ。

（なぜ、あの時、斬ってしまわなかったのか？）

急にこう考えて、われながらその考えの恐ろしさにふるえた。それでも、この恐怖を乗り切って何とかしなければいけないということは確かだった。この考えは、朝のしらじらとした色が雨戸の隙から洩れはじめる頃までに、堀田隼人の頭に、次第にはっきりとした形をとってかたまって来ていた。

それから、ぐっすりと、まるで死んだようになって眠ってしまった。

鎌倉河岸にある仙吉の家には、早朝から子分の目明しが詰め掛けて来ていた。

「ともかく、こりゃア洒落や冗談でやった仕事じゃない。はたいてみたらどんな大物が飛び出すかわからねえンだ。いいか、紋は鷹の羽で、まだ若けえ男だ。多分浪人もんだろうと思う。手ぬかりなくやってくれ。おれも一風呂あびたら出掛けるつもりだ」

仙吉は、元気よくこういって、手拭と楊子をつかんで立ちあがった。

花の雨

「障子をあけるぜ。こう、むしむししてはたまらない。すこし風を入れなけりゃア……」

「だから勝手だっていうンですよ」

「なにが？」

と顔を見合わせてお互ににっとする。

暗くなって来た障子の面に庭木の緑がほのかに明るい。犬医者の丸岡朴庵は、たてつづけに煙草を二、三服しながら立って帯を直している妾のお千賀をものうい目をして眺めていた。

外は、花時にある曇り空だった。朝、朴庵が家を出る時から、ひと雨ありそうな気がしていたのだが晴れるとも降るともつかず今まで持ち越して、汗ばんで、むしむしと暑い。大気は、悪い酒のようにどんよりと頭に重かった。

部屋全体が小暗い中に、立っているお千賀だけは明るく見える。その白い手が器用に働いて、畳に蛇のようにうねっている竜門の帯を、くるくると、しなやかに胴に巻いている間中、派手な着物の裾が五彩の色の渦を流して目もあやに動いているのだった。

ぼんやりと見ている朴庵を、当世風の、ふっくらした白い顔が明るく笑いながら振り返った。

「水木結びですわ」

と、背中の帯の結び目を見せる。

「ふうむ、なるほどいつものと変わっているな。流行なのか？」

「ええ」

明るくうなずく。

「だんだん世間の女が綺麗になって来たなあ。ひと頃にくらべると随分派手作りで贅沢になったものだ。おれも、十年遅く生まれ

たらもっといいことがあったろうと思うよ。これからの若い者は倖せだ」
「あら……そんなお年でも御座いませんわ。随分お年寄りくさいことをおっしゃいますね」
お千賀が笑ったので、朴庵も笑った。
五十に手の届いている朴庵に比べて、お千賀は、まだ二十になっていない。この年の隔たりが時折朴庵の憂鬱をそそることがある。しかし考えて見れば自分が麹町で箸を削っている頃、どうしてお千賀のような若い美しい女が自分の所有になると空想出来たろう。思えば夢のような気持がする。夢といえば、今の結構な境遇になってからも、時々、自分の昔のように、廂の低い棟割長屋で箸を削っている夢を見て、ぞっとすることがあった。直ぐ傍の溝の、すっぱいような臭気まで夢の中でにおっていたものである。今では、それがなくなって、初めから今の身分だったような気がしているが……、何といっても御時世だ。この御時世でなかったらおれは一生浮かびあがらずに一生箸を削っていたろう。お千賀だって、おれに振り向きもしなかったろう……つくづく考えて自分が世の中での果報者のように思われるのだ。
お千賀は、膝を崩して坐って、朴庵の煙草を吸いはじめた。まだ顔にどこか稚ないところが残っている癖に、色っぽい所作である。
(誰でもない、おれが、ここまで仕込んだ)
朴庵は、こう考えて、いうばかりなく満足に思いながら障子をあけた。
「こりゃア、いよいよ降って来るな。どこかで、もう蛙がないているぜ」
「そうですねえ、どうしても、いらっしゃらなければ、いけないんですか?」
「うむ。折角のおよばれだからな。しかし流石は三国屋さんだ。桜がまだすっかり咲き揃わぬというのに、牡丹を見せようという。どうやって咲かせたものか知らないが、やはり花も金の力で咲くと見える。豪勢なものだなあ」
といったが、
「うむ、大分御身分のある方がお揃いの筈だ。そういう場所へは、なるべく顔を出しておくことさ。犬も歩けば棒にあたるというから……」

丸岡朴庵が、三国屋の別荘のある向島へ着いたのは今の午後四時頃だった。一時今にも泣き出しそうに見えた空は、雲が切れて薄日をもらし、大川に銀鼠の色を流している。土手の桜は七分というところだったが、気の早い花見舟が三味線や太鼓に川面を騒がせて幾隻も上り下りして行く。土手の上には、無論、真黒な人出が、埃をあびて、ざわざわと涯なくつづいていた。
朴庵の駕籠は、白鬚の渡を渡ってから道を右に折れた。間もなく古い土塀や、繁りに繁った生垣の間を行く。木立の深い、大名の下屋敷や寺などが並んでいて、一町とはなれない土手の雑沓と

は比較にならぬくらい深閑と静かである。
どこかで鶯の声が聞こえた。
(そうだ)
とふと思い出したことがある。
近頃発句をはじめているのである。地位が出来、金が出来た上は、風流の道の心得がひととおり必要なのである。朴庵はそれに気がついて、近頃謡曲と発句の稽古をはじめている。明日は宗匠が来る。この前の時今度までに作って置くようにと渡された題が鶯だったのを、すっかり忘れていた。風流とは、なかなかいそがしいものである。
「鶯や……」
と思わず口誦む。
「へえ……」
と駕籠かきが返事をした。
「何かおっしゃいまして御座いますか」
「いや」
と、相手の無風流を怒ったような声で答えて、腕を組む。
(鶯や……)
である。
しかし、この鶯が、二声と啼かない内に駕籠は、三国屋の別荘の門をくぐって、幽邃な木立の間の道を玄関まで通った。玄関の左右には立派な駕籠が幾つもならんでいる。この危うい空模様に、これだけの客を集めたのは、流石三国屋の金の力と感心しながら、丁度駕籠が地に降りたので、外へ出た。
「や、これは、先生……」
こういって、駈けよったのは、三国屋の亭主だが、今日は羽織袴で扇子を持って、きちんとしている。
「よく、おいで下さいました」
「いや、今日は私までお招きに預かりまして……」
「さあさあ」と、振り返ると、傍に控えていた御守殿粧の腰元が、牡丹の模様のある長い袖をひるがえし案内に立とうとする。
その間に、三国屋は、別に入って来た客を迎えに走り出ている。これは、宗匠風の、渋い服装をした老人で、駕籠にも乗らず若い侍を供に連れて徒歩で来たのだが、三国屋が、その前に出て砂をなめそうにしてお辞儀をしているのは余程の大身の御隠居だと見える。やせぎすの、枯れた顔立だが、目が大きくて、ぎょろぎょろしている。
「どなた様だね?」
朴庵はそっと、腰元に尋ねた。
「はい」
と、つつましく、
「御高家、吉良様で御座りまする」
成程と思った。
吉良義央、上野介、禄は四千二百石だが、従四位上、高家の肝煎りとして、一部に非常な勢力があると聞いている。
高家といえば普通の大名とは違う、今でいえば式部職の家柄で

公家往来、儀式典礼の事などをつかさどる。禄は五千石を越えることはないが官位は大々名よりは上で、城中でも雁の間伺候、十万石の大名と同班であって、格式は上だ。殊にどんな大諸侯でも営中の式事に当る時など、万事専門の高家から援けてもらわないと手違いなど起こして面目にかかわることになる。また元来高家が位ばかり高くて禄が薄いところからむやみに威張って、妙に意地が悪いというようなことが珍しくなく、大名の方から余程うまくして置かないと際どいところでひどい目にあわされることがある。吉良家というのが、その高家の一つだが、肝煎りといって月番を勤めているし、当主上野介義央というのは、従四位上の少将、妻は米沢の大名上杉氏から出て、また長子の綱憲というのが母の実家上杉氏を継いでいるのであるからこの方面の背景もあり、加うるに今将軍綱吉の寵臣としてその勢力飛ぶ鳥をおとす柳沢吉保に巧みに取り入っているとかで、なかなかの勢力があるとは、なり上りの犬医者丸岡朴庵でも噂に聞いて知っていたのだ。

「ははあ、あの方が……なるほど、なるほど……」

と他愛なく目をまるくした。

「どうぞ、こちらへ……」

案内の腰元が傍からいう。

「は、はい」

ぽかんとしていたところだったので、思わず返事を重ねて、赤面した。もっとどっしりと落着きを見せて万事鷹揚にしていなくてはいけない。

朴庵が三国屋と知合いになったのは、五年ばかり以前に三国屋の犬が病気にかかったのを診察に行ってからだった。その頃の三国屋は米の相場であてた出来星の金持というだけのことだったが、その時会話の間に自分が護持院の大僧正様と懇意だというようにふと朴庵が口をすべらすと、それから三国屋が毎日のように物を持って訪ねて来たり、他所へ招いたりしてから是非一度大僧正様にお目にかかれるようにしてくれというたのみで朴庵が骨を折ってやったのだが、多分それからのことだったろうと思う。三国屋が柳沢様を始め方々の大々名に出入りがかなって、めきめきと今の身上を作り上げてしまった。今では、かえって朴庵などより上流に顔がひろくなっていることは、今日の客の顔ぶれを見ても大凡想像が出来ることだった。

この寮なども大したものである。度々の御禁令で外構えは質素に普通の別荘とかわりはないが、さて内へ入って見ると、あまり目立たないところに金がかけてあって、造作にしろ、調度にしろ、大名物ばかり、朴庵など、内へ入ると妙に圧迫されるような気がして腰が浮いていけない。

（商人も、こうなりゃアたいしたもの。大名以上だな。それにしても吉良様などと、どうやって因縁を結んだものか……とにかく、すばしこいことといえば、目から鼻へ抜けるような男だ）

と思う間もなく、それまでの内廊下が切れて広い庭が目の前にひらけた。

これはまた素晴らしいものだ。勿論いずれ名のある造庭家の設

計になったものであろうが、画に見るような削り立った岩山が空に聳えていて、その裾に木々が鬱蒼たるばかりに枝を交えて立っていて、奥深く、小暗いところに白く滝が落ちてさえいるではないか？

「これは、これは？」

と朴庵が茫然とした。

と、後で、

「こりゃア三国屋、すこし過ぎはしまいか？」

こういったのは、何時の間にか朴庵の後に追いついていた上野介である。

「おとがめを受けるのも馬鹿らしいぞ」

「いえ、一晩でこしらえた山で御座りまする。明朝までには、お目ざわりにならぬようのけることに致しておりますので」

と、亭主が手をもみながら、いよいよ驚くべき言葉である。

「なに、一晩で？」

上野介もあきれたらしく、無口でいたが急に笑い出して、

「は、は……金だのう。じゃが、随分とかかったであろう」

「いえ、左様なことは御座りませぬ。種をおあかしすれば、樹木や石は庭に御座いましたものをそのまま用いましたゆえ、あとは、ただ人間の手間だけで御座りますから、……仕事をこまかく分けまして人数を多く用い、手順をきめて、一番手の仕事が終れば直ぐ二番手がかかるという風に、采配一つの働き。一人一人の仕事は僅かのもので、手間も至って僅少で済みまして御座りまする」

「いや、金の力に知恵が結びついたのだ。これ以上恐ろしいものはあるまい。その方、なかなか軍師だな。いずれ、その費用も十倍百倍となって懐中へ戻って来る企画がおありだろう。いや当節は万事、金だ」

「何事もお武家様あっての町人に御座りまする」

と、亭主は何所までも腰が低い。が、吉良様という方もなかなかさばけた、きさくな御仁らしい。朴庵は道をあけて目立たぬように小さくなっていながら、ひそかに感心していた。

「が、牡丹はどこにある」

上野介のこの不審はもっともであった。眺め渡したところ花の色はどこにもない。曇天の鈍い日ざしをはじいている鼠色の岩肌と、苔と、黒いまでに繁った樹木があるばかり、ながめは閑雅というのに近く、またほかに客らしい人影も見えなかったのだ。

亭主がにっこりして、

「ただ今、御案内つかまつりまする」

と振り返ると、それまで、つつましやかにそばに控えていた腰元が用意の新しい福草履を出して沓脱石の上に揃える。

その時、上野介が振り返って朴庵の方を見て笑いながら、

「さ、御一緒にまいろう」

「いえ、手前は……」

と、おずおず尻込みしながら、感激のあまり顔をあかくしていたが、三国屋もすすめるので自分も草履をはいて、恐る恐る、ず

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com